

## ロシアの性愛論 I : トルストイの『クロイツェル・ソナタ』

青山, 太郎  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5385>

---

出版情報 : 言語文化論究. 6, pp.149-158, 1995-03-10. 九州大学言語文化部  
バージョン :  
権利関係 :

## ロシアの性愛論 I

トルストイの『クロイツェル・ソナタ』

青山太郎

## 1

「ロシアの性愛論」とは、ロシアの作家・思想家たちが性愛をどう考えたかについての考察という意味です。その際ロシアという国の精神風土の特性からして、当然のことながら彼らの論議はキリスト教の基盤の上に展開されますから、「ロシアの性愛論」というテーマは「性愛とキリスト教」というテーマとかなりの程度重り合ってきます。

ロシアで性愛の問題を最初に正面切ってとり上げた作品はトルストイの『クロイツェル・ソナタ』(1890)ですから、ここから話を始めることにします。

女権拡張運動、フェミニズムの理念は、19世紀後半に至ってロシアにも徐々に滲透してきますが、この思潮はロシアでは社会主義思想ととりわけ強く結びつくことで独自の色彩を帯びます。よい例がチェルヌイシエフスキーの『何をなすべきか』(1863)で、これはその前年に出たトゥルゲーネフの『父と子』への論駁として書かれたものですが、ここに展開された思想は60年代の若いインテリゲンチアから熱狂的に迎えられ、この本はロシア革命家たちのバイブルとなりました。これは一種の空想的ユートピア小説で、文学的にはさして高い地位を要求することはできませんが、その代りここには、19世紀ロシアの進歩的知識人たちが理想とした女性観、結婚観、倫理観が典型的に現われており、その意味ですこぶる興味深い。

この小説は、ヴェーラ・パーヴロヴナというひとりの若い女性が家庭的・社会的桎梏から次第に自由になり自立してゆく過程を描いたもので、彼女は親の押しつける結婚を嫌い、ロプホーフという若い医学生と擬装結婚をします。二人の間に通常の夫婦生活はなく、部屋と財政を別にし、互いの人格を尊重し、互いの生活に干渉しない。そんな生活を送っているうちに、ヴェーラは別の医学生キルサーノフと恋に落ちます。ロプホーフとキルサーノフは話し合い、ロプホーフは退いてヴェーラとキルサーノフを結婚させようとはしますが、キルサーノフはこの寛大な申出を断ります。60年代ロシアの社会通念では、そうした場合新夫婦は不倫者の謗りを免れないからです。ロプホーフは自殺を装い失踪します。未亡人となったヴェーラはキルサーノフと結婚し、理想的な家庭を築きます。ロプホーフは数年後、名を変えて、新しい妻を伴ってアメリカから帰国し、ここに二組の男女は完き調和の内に新たな世界の創造に向けて邁進することになる。

ここには女性の社会的・経済的自立、男女の完き同権、恋愛の自由といったフェミニズムの理念に基いて、困難な三角関係の解決が示されています。ヴェーラは解放された女性の典型です。彼女は、夫婦はあらゆる点で対等である、男女の同権と相互の理解なくして男女間の愛はありえず、それゆえ結婚もありえない、そして愛のない結婚は売春と同じ犯罪である、といった結婚観を体現しています。

ここでは結婚と家庭はそれ自体の価値を認められるというより、大義（革命）をめざす社会的活動へと人間を備えさせるひとつの前提条件といったものです。

ところで、トルストイは若い頃から、こうした進歩的女性観・結婚観が大嫌いでした。初期の作品『結婚の幸福』（1859）において女の務めはよき家庭を作ることにあるという考えを表明して以来、この考えは『戦争と平和』（1869）を貫流して『アンナ・カレーニナ』（1877）にまで及んでいます。1864年には『伝染病にかかった家庭』という5幕の喜劇（すこぶる不出来ですが）を書いて、新思想にかぶれた若い人々をからかっています。トゥルゲーネフやドストエフスキーと違い、トルストイは60年代の新思想にはほとんど関心を抱かなかった。現代小説たる『アンナ・カレーニナ』もこの問題には触れていません。トルストイの関心は、アンナの不倫による破滅の物語と、レーヴィンとキティーの家庭事情にあるのであって、ここで作者は、出産と育児をないがしろにするアンナを、厳しく罰しています。

アンナばかりではありません。ヴロンスキー、コズヌイシェフ、ワーレニカといった登場人物たちも皆、家庭を築きえないことによって不幸に終るのであり、それゆえ作者により断罪されているのだと言えます。『戦争と平和』においても主人公たちは、ピエールとナターシャにしろ、ニコライとマリヤにしろ、いずれも結末では結婚し、家庭の場において幸福を見出しています。その意味で『アンナ・カレーニナ』に至るまでのトルストイの関心は、人間いかにして理想的な家庭を築くかという倫理問題にあったと言っても過言ではありません。この時代のトルストイにとって、家庭とは神聖なものであり、女性の使命は子供を生み育てることにありました。

1868年にはJ=S・ミルの『婦人の隷従』のロシア語訳が出て評判になり、たちまち版

を重ねました。保守派の論客ストラホフは書評で、この書的女権拡張論の一面的であることを指摘しましたが、これに共感したトルストイは、それまで面識のなかったストラホフに手紙を書き賛意を表明しています。

ところが、『アンナ・カレーニナ』から10年後の1886年に発表された『イワン・イリッチの死』においては、既に家庭は完全に崩壊してしまっています。イワン・イリッチ・ゴロヴィンの家庭とポズヌイシェフの家庭はよく似ています。どちらも世間的には一点非の打ちどころない家庭と見えますが、一步内へ足を踏み入れてみれば、そこに開けるのは荒涼索漠たる砂を噛むような精神世界です。イワン・イリッチは一切の家庭の絆から自由になって、絶対的な孤独の内に死んでゆきます。ここでは家庭はもはや、人間を救いうる何ものかではないのです。

家庭を成立させるものは男女の結婚であり、結婚の根底にあるものは夫婦の性生活です。

『イワン・イリッチの死』から3年後の『クロイツェル・ソナタ』では、結婚生活がその根底たる性の側面からとり上げられ、攻撃されています。

1887年9月23日、ヤースナヤ・ポリヤーナのトルストイ家は、夫妻の結婚生活25周年にあたり、ささやかな銀婚式を祝いました。この頃トルストイは友人の俳優アンドレーエフ＝ブルラークから或る体験談を聞かされ、これを早速書きとめました。これが『クロイツェル・ソナタ』の第一稿です。この体験談とは、或る時汽車の中で未知の人物が俳優に不幸な結婚生活の転末をこぼしたというもので、この第一稿では妻の友人は未だ音楽家ではなく画家であり、音楽は物語の内できしたる役割を演じていませんでした。

1888年3月20日付チュエルトコフ宛ての手紙から察するに、この頃のトルストイの性愛に関する考え方は未だ比較的穏かなもので、結婚における性交は罪ではなく、むしろ神の意

志である。性交がなければ子供も生れず、子供が生れなければ人類はその事業を子供に継承させることができず、地上に神の国を建設する望みも断たれてしまう、と考えていたようです。しかしトルストイは、ひとたび或る理念に取り憑かれたらそれをとことん突きつめずにはいられぬマクシマリストでしたから、その後幾度かの中断と改変を経て、1889年夏に作品がほぼ完成した時、そこに表明された理念は、夫婦間においてすら性交は慎むべきであるという極端な主張に達していました。

1889年10月、ほぼ決定稿に近い草稿のコピーがペテルブルクへ運ばれ私的な集りで朗読されました。その夜のうちに手書きのコピーが作られ、数日後には既に石版刷りの800部がペテルブルク中に出回っていたようで、幾つかの書店はこんにやく版のコピーを売り出しさえました。数週間にして作品は両首都から地方へ広まり、こうしてこの作品は未だ出版もされず検閲も通らないうちから、ロシア中を熱狂させたわけです。人々は会えば「クロイツェル・ソナタを読みましたか」というのが挨拶代りになったと言われます。同時に楽譜店では、ベートーヴェンの同名のソナタの楽譜がまるでホットケーキのように売れだしたそうです。

この作品をめぐって捲き起った喧々囂々たる議論の結果、作者のもとに寄せられる読者の手紙は急増しました。これらの手紙は作品への非難か、あるいはその思想に戸惑った読者が作者にその真意を質すというものが殆どでしたから、1890年春、トルストイは作品自体の完成をひとまず先に延ばし、「後書」のかたちで作品の意図を明かにしようとはしました。ここでは、性交は結婚外ではもちろん、結婚内でもなるべくなしですますべきだという主張が一層明瞭に開陳され、さらにキリスト教的結婚なるものはありえない、教会結婚とは教会の捏造であるという教会批判が展開されていました。

この「クロイツェル・ソナタの後書」なる文章は一風変わった性格を有しています。トルストイはここで、「わたしが主人公の口に託した諸々の見解は、お察しのとおり、ほかでもない、わたし自身の見解である」と確言しているのです。普通、作家はこういうことをしません。作家は普通、ひとたび書かれた作品は作者とは別個の自立した存在であるという立場を堅持し、作品が作者の手になるものであることの証跡をなんとか消し去ろうと努めるものです。トルストイはここでは反対に、主人公の言説の責任を自ら引受けようとする。これは道義的には潔いことかもしれないが、作家と作品にとって危険なことではあります。

1890年には早くもベルリンで3種のドイツ語訳が出ていますが、うち二つは「後書」をも収めています。もっとも、これらの版はいずれも未定稿のコピーに基く極めて不完全なものでした。作品の決定稿が成るのは、1890年末のことです。

## 2

早春のこと、永い汽車旅の客車の中で、話者はひとりの男と知り合います。この男は学士で貴族会長であるといいますが、つまりは上流階級・知識階級に属する人間ですが、その举止振舞にはひどく神経質で突発的なところがあり、周囲との接触を嫌う様子が見てとれる。この男をその孤立から引きずり出したのは、周囲の乗客たちの結婚談議でした。

周囲の乗客たちというのは、男物めいた外套を着てすばすば煙草をふかす中年の婦人と、その連れもの40歳くらいの男性(弁護士)、それと年寄りの商人といった人々です。トルストイは彼らの口を通して、当時行われていたであろう代表的な結婚観・女性観を語らせています。話が離婚問題に及ぶと、老商人は、昔はこんなことはなかった、これもひとえに、あまりに教育が進みすぎたせいだと言って、

現代の風潮を非難します。女には勝手な真似をさせてはいけない。妻たるもの、夫を怖れなくてははいけない。イヴがアダムの肋骨から創られてこのかた、これが世の終りまで永劫変ることのない掟である、と。つまりこれは、妻は夫に従属すべしという旧来の家父長的結婚観、新思潮たる女性解放運動がそれに抗して立ったところの結婚観です。

乗客のうちこの新思潮を代表するのは先の中年の婦人と弁護士で、2人は老人に向い、結婚の根底には何よりも先ず愛がなくてははいけない。愛のない結婚は結婚ではない。愛により聖化された結婚のみが真の結婚であると主張します。

この議論を傍で聞いていたポズヌイシェフは、とうとうたまらなくなつて一同の話に口を挿みます。彼に言わせれば、結婚を聖化する精神的愛なぞというものは存在しない。世間はそういうものが存在する振りをしているが、実際に存在するのは肉欲のみで、この肉欲には必ず飽満が来るから、それは遅かれ早かれ終らざるをえない。

「あなたは肉の愛ばかり論じていらつしゃいますが、いったいあなたは理想の一致とか、精神的親和力とかを基礎とした愛をお認めになりませんか」と婦人は尋ねます。ポズヌイシェフは答える、「精神的親和力ですか！理想の一致ですか！しかしそれなら、一緒に寝る必要は何らないじゃありませんか」。

こうした前置きののち、いかにしてポズヌイシェフの眼が開かれ、すべてを別の光で見るようになったか、「女と女に対する関係について、われわれが陥っている迷妄の深淵」を覗き込むに至ったかという物語が始まります。つまり彼がいかにして妻を殺すに至ったかという物語です。

殺人は、本質的に不道德な結婚の当然の結果にすぎなかった。トルストイは、夫による妻殺しをそのように描いています。主人公は早くから世間の墮落した風潮に染まり、誤っ

た性愛観の内に成長します。彼の生活は、若い健康な男が当時の社会通念に従って送っている態のもので、世間的には非の打ちどころのないものですが、それでも彼の性生活が墮落したものであることに変わりはない。性生活に関する世間の規格そのものが、既に虚像を孕んだものであるからです。『クロイツェル・ソナタ』の前半部は、この社会通念へのボズヌイシェフの弾劾から成っています。

女性を快楽の対象と見る見方は、非常に早くから彼に取り憑きます。彼が童貞を失うのは16歳の時のことで、彼は兄の友人に連れられて娼家へ出かけて行くのですが、彼は常日頃これが墮落であるとはいささかも聞いていなかった。それどころか周囲はこれを目して、一人前の男子にとっての「極めて正当な、健康上有益な行為」、「自然で無邪気な青年の娯楽」としていたのです。医学はこの考えを是認し、政府もこの考えの普及に手を貸して、娼家の営業法に適切な規制を施け、性病の予防法を定め、若者たちの淫蕩を保護奨励している。こうして、肉体関係を結んだ女性に対し道徳的義務を免れようとする態度、金さえ払えばすべては解決し、当人は相変らず自分を道徳的人間だと思っていられる、そういう態度が社会通念として形成されます。しかるにポズヌイシェフ（トルストイ）によれば、「自分の快楽のために1人以上の女を知った男は、既にノーマルな人間ではなく、永久に損われた人間、すなわち放蕩者」なのです。彼の内では、女性に対する自然で卒直な関係が永久に滅びてしまっている。世の男というものは、10人中9人までがこの放蕩者です。

ポズヌイシェフの論議には、ビョルンソンの『手套』（1883）やイブセンの『幽霊』（1881）を憶わせるものが多々あります。つまり、ブルジョア社会における頹廢した性道徳の剔抉です。しかし話が彼の結婚生活に及ぶにつれ、論調は次第にシニカルな色彩を強め、問題が社会的次元から超社会的次元へ移行してゆく

のが感じられます。性道德の社会的頹廃を剔抉するには、根底となる理想がなくてはなりません。ところが主人公の話が進むにつれ、そうした理想なぞ実はまるで存在しないことが分ってくる。男女を結びつけ結婚を神聖なものたらしめる高次の理想なぞ、皆目存在しないことが分ってくる。ポズヌイシェフが結婚の内に見ているものは、男と女の肉欲による結びつきのみであるからです。『手套』の根底にあるのは、結婚に際し男が女に純潔を求める以上、女も男に純潔を求めるのは当然だという理念でした。『人形の家』(1879)のノラは、夫が彼女を可愛らしい人形扱いはばかりで、対等の人格として見ていないことに抗議して家を出ます。ここには個人の尊厳の理念があり、結婚生活は互いに人格を尊重し合う男女の対等な関係の上に築かれるべきであるという理念があります。トルストイにも或る意味で男女対等の理念はあります。ただしそれは、男女が裸のままの肉欲の所持者として対等だというのであって、個人の尊厳なぞはとうに吹き飛んでしまって何もありません。これはおそらく、ストリンドベリが『人形の家』に対して感じた苛立ちでもあったと思われる。

ポズヌイシェフの妻殺しは不道德な結婚生活の結果でした。だがそれでは、道徳的な結婚をすれば殺人には至らないのかというと、道徳的な結婚なんぞはありえないというのがポズヌイシェフの意見ですから、彼の立場には出口がない。彼に言わせれば、あらゆる結婚は妻殺しに終るということになる。われわれは皆、有形無形の違いこそあれ殺人者なのだ。妻と寝る夫は多かれ少なかれ妻を殺しているのだというのが、結婚に浴びせるポズヌイシェフの呪詛です。

イブセンやビョルンソンが暴いた男女の社会的不平等は、こんにちかなりの程度匡正されています。『クロイツェル・ソナタ』は女性解放論議の枠を越えて、性と結婚の深みにま

で垂鉛を下しました。トルストイはここで、恋愛と結婚に被せられた様々な装飾模様を剥ぎ取って、その根底には裸のままの肉欲しかないという事実をつきとめた。そこに彼の見出したものが絶対的な肉欲であった以上、これへの解毒剤として彼の処方するものが肉欲の絶対的否定、つまり絶対的な純潔の提唱であったことは見易い道理です。彼にはこれ以下のものを提唱することはできなかった。

トルストイにとって結婚とは、男女が思う存分肉欲に耽るための許可を社会から得ること、そのための手続にほかなりません。30歳になった頃ポズヌイシェフは結婚します。彼は自分では放蕩者としての生活を送りながら、その間も結婚相手としては清純無垢な娘を望み、物色していました。ようやく理想的な娘が見つかって有頂点になるわけですが、これは所詮彼が女の仕掛けた陥穽にまんまとはまっただけのことです。彼は選んだのは自分だと思っていたのですが、その実選ばせられていたにすぎない。こんにち男女の性的関係において、確かに男が女を選ぶかたちになっている。この剝奪された権利をめぐって、女は男に復讐します。女は、男が必要とするものは女の肉体のみであることを承知して、この肉体で男を釣ります。「男たちはあたしたちを肉欲の対象としか見ていない。それならあたしたちは肉欲の対象として男たちを支配してやろう」というわけです。そこで女は男の肉感に働きかけ、肉感を通して男を征服することで、表面的には男が選択するように見えながら、実は女が選択するようにさせている。ポズヌイシェフ(トルストイ)が現代社会における「婦人の隷従」ならぬ「婦人の専制」を結論するのはこのためです。

ポズヌイシェフの妻は8年間に5人の子を生み、1番上の子を除き、これら子供たちをすべて自分の乳で育てましたが、その後健康が思わしくないというので、医者は彼女にこれ以上子供を生むことを禁じ、そのための避

妊の方法を教えます。夫婦の生活からは、その「豚のような生活の唯一の存在理由たる子供が奪い去られた」わけです。子供を生むのをやめてからというものは妻は次第に美しくなり、主人公は絶えず嫉妬に悩まされるようになります。それまで家事と育児に忙殺されていた妻は、永いこと中断していたピアノの練習を再開し、ここにパリ仕込みのヴァイオリニスト、トルハチェフスキーの登場となります。妻とヴァイオリニストの間に実際に不倫関係があったのかどうか、これは物語の内でも明かにされていません。

## 3

トルストイによれば、性欲は人間の理性を曇らせ、人間を動物の次元へと押し戻すがゆえに悪であり、これに身を任せることは罪なのです。「性欲の襲来は思想の混乱を、いやむしろ思想の欠如をきたす」と彼は言っています。これに襲われる時、人は自らを制御できない。トルストイは性の快樂と、音楽のもたらす喜びの間に、或る種のアナロジーを見えています。トルストイにとって音楽は、女同様、何かしら犯罪的なものを秘めており、音楽は女同様、悪魔の化身なのです。彼は終生音楽をこよなく愛し、自らもピアノを弾きました。同様に、彼は晩年に至るまで性欲に悩まされ続けました。

地上に神の国を到来させんとするキリスト教の理想にとって、最大の障害は性欲の存在です。生きることの目的は神への奉仕に存するのですが、性行為は自らへの奉仕にはかならないからです。しかるにこんにち性欲は悪として排斥される代りに、何かしら人間を高めるものとして美化され、詩文により賞揚されており、われわれはこれを抑えたり低めたりすべく努める代りに、かえってあらゆる手段を尽してこれを燃たせようとしている。これはよくないことだとトルストイは言うわけ

です。

人間は生涯純潔を守り、結婚しないであることこそが最良の道なのです。しかし人間は弱い存在であり、とかく性欲の誘惑に屈しがちなものです。その場合正しい結婚は、言わば純潔に次ぐ次善の道です。キリスト教は結婚を肯定してはいませんが、しかし禁じてもいない。かえって離婚を禁じている。結婚した以上は結婚において最大の純潔を守ること、これがキリスト教の教えるところなのです。結婚は墮落です。しかしこの墮落を償う道はある。それは相手が誰であろうと、最初に墮落した相手と結婚し、以後この相手と力を合せて純潔の道をめざすことです。すなわち、夫婦間においてもできるだけ性欲に耽ることを慎しみ、夫婦としてよりも兄妹として生きるべく努めることです。

もっとも、夫婦間の性交についてはこれを罪と見るべきか見るべきではないか、トルストイの考えは明かに揺れ動いており、一方では、結婚における性交は姦淫ではない、子供の出生を目的とし、精神的愛の内に行われる妻との性交は罪ではなく、神の意志であるとも言っています。しかしたとえ相手が妻であっても、単なる性欲のための性交は罪悪である。既婚者未婚者の別なく、主たる罪悪は快樂の対象として女を見ることだからです。

(しかしこの世のいったい誰が性欲抜きで、子供の出生のみを目的として妻を抱くでしょうか。この点では、トルストイよりもポズヌイシェフのほうが遙かに炯眼であったと言わざるをえません。)

トルストイによれば、性的本能とそれに基づく性交は、それが子供の出生を目的とする場合にのみ神の前に正当化される。子供を生むのは、地上に神の国を建設するというわれわれには実現しえなかった理想を、子供たちに受け継がせるためだからです。そこには、人間が一代では達しえない理想を次代において達しさせようという、神の意志が働いてい

る。人が神の法則の実現に、つまり道徳的完成に、近づけば近づくほど性欲は弱まり、逆に、性欲にのめり込めばのめり込むほど神の法則の実現から遠ざかるのは、このためである。

快樂のための性交は罪だが、子供を生むための性交は罪ではないという考えは、アウグスチヌスをはじめキリスト教の多くの教父たちに見られるもので、遡れば既にピタゴラス学派にあるものだそうです。ショーペンハウエルはこの考え方の矛盾を正しく指摘しています(岩波文庫『自殺について』P. 92)。つまり、性交がもはやそれ自体のために意欲されないとすれば、それはとりも直さず性欲が存在しないということですから、性欲の減却という目的は既に達せられているわけで、この目的のために人類の継続を図るなどは無意味だというわけです。そしてショーペンハウエルは、情熱も性欲もなしに、ただ純粋な考慮と冷静な目論見に従って子供を生むという行為がありえたなら、そうした行為と赤裸々な性欲衝動からの生殖行為との関係は、あたかも、冷静に熟慮してなされた殺人と怒りにまかせて人を撲り殺した場合との関係といったものだろう、と語っています。

性欲減却のための次代の戦士たちを生むために性交に訴えねばならないというのは、罪をなくすために罪を犯さねばならぬということで、明かな矛盾です。ここには性問題に関してキリスト教の陥った困難な立場が露呈しているものであり、これはキリスト教があくまで快樂ではない性交を要求することに由来すると思われる。トルストイはおそらくこのことを感じ取っていたのであり、彼の行き着いた結論が、夫婦間においても性交は御法度という極端なものであったのはそのためです。

人が目指すべきは、実践上のみならず精神上での完き純潔、つまり性欲からの完全な解放である以上、この理想が到達された暁には、人類はもはやこの地上に生きる理由を失い滅

亡するでありましょう。理想を実現して滅亡するなら滅亡も結構であり、これを惜しむいわれはありませんし、またこのことは、理想が誤っていることの論証にもなりません。ドストエフスキーの『悪霊』には、人間は意識的な自殺により死を克服することで自ら神となるのだと主張する、キリーロフという人物が出てきます。人類は性欲を断つことによって理想を実現し、それによって滅亡するのだと説くトルストイは、このキリーロフになんと似ていることでしょう。

しかし人類は決して滅亡しないでしょう。というのは、生きている人間は元来が淫蕩であり、純潔たりえないからです。それゆえ一層正確には、人が自らに課すべきは純潔ではなく、純潔への努力、純潔への接近であると言すべきでしょう。ここでトルストイは、理想と規範の区別に関して興味深い論を展開しています。キリスト教の言う純潔とは、理想であって規範ではなく、人生のいかなる段階、いかなる状況にあっても人の進むべき方向を指し示す、羅針盤のようなものだということです。トルストイ晩年の遺稿に『セルギー神父』という小説があります。ここで作家は、禁欲の戒律に固執するなぞ大して意味のあることではなく、人生の謎はさらにその先にあることを悟ったひとりの修道僧の姿を描いています。

トルストイの結婚観において注目すべきは、彼が自らの所説の裏付けとして福音書を援用していることです。トルストイによれば、福音書中にあるのは結婚の否定と、放蕩・情欲・離婚への反対とであって、結婚制度については暗示すらない。キリストは結婚しなかったし、使徒たちも結婚しなかった。キリストは一度も結婚について制定しなかった。結婚に関するキリストの考えとは、福音書から読み取れる限り次の3点に要約できる。キリストは、  
1. 未婚者に対しては、なるべく結婚しない  
ほうがよいと語った(マタイ伝19:

10—12)。

2. 既婚者に対しては、妻を換えてはならないと語った (マタイ伝 5 : 31, 32, 19 : 8)。
3. 未婚者既婚者のいづれに対しても、主たる罪悪は快樂の対象として女を見ることだと説いた (マタイ伝 5 : 28, 29)。

はたしてトルストイの言うとおり、福音書の伝えるキリストの言説の内には結婚を肯定するものがないか、これは大いに問題のあるところです。例として次の個所を挙げておきます。

『人を造り給ひしもの、元始<sup>はじめ</sup>より之を男と女とに造り、而して、「斯る故に人は父母を離れ、その妻に合ひて、二人のもの一体となるべし」と言ひ給ひしを未だ読まぬか。然れば、はや二人にはあらず、一体なり。この故に神の合せ給ひし者は人これを離すべからず』 (マタイ伝 19・4—6)

また、旧約の『創世記』の冒頭では、神は最初の男女に向い「生よ繁殖<sup>うめふえ</sup>よ地に満てよ」と言っています。

福音書の真意が何であるかはさておき、ここで重要なのは、トルストイが福音書の内に結婚の否定を見たという事実です。このことは彼のキリスト教解釈に関わっています。

トルストイによれば、キリストの教へは人生の形式を決定するものではない。ただ人事全般に亘って理想と進むべき方向を指し示すだけです。しかるに、外面的制度に慣れたパリサイ人のたぐいはとかく形式の決定を欲するものであり、彼らはキリストの言葉から外面的教義を作り出し、人生の外面的形式として制定した。真のキリストの理想が外面的教義規範により拘りかえられたわけで、政治、司法、軍事、礼拝、結婚等に関する教会の教義規範とは、いずれもこの種の贗造物である。キリスト教的結婚なるものはありえず、またかつてあったこともない。ちょうどキリスト教の教会内礼拝、キリスト教的財産、キリス

ト教的国家、キリスト教的軍隊、キリスト教的法廷がありえないのと同様である。

キリストは結婚制度を設けず、ただ絶対の純潔という理想を指し示しただけだったが、形式に拘泥し外面的制度を欲する人々は教会結婚の制度を制定した。これにより結婚と恋愛と性欲は正当化され、これらはキリスト教にとっていささかも罪ではないということになった。つまり教会の定める一定の手続さえ踏めば、結婚も恋愛も性欲の満足も思いのままということになり、純潔の理想はもちろん見失われてしまった。

教会はこの手続に一定の宗教的意味 (婚配機密、婚姻秘跡) を賦与しており、人々がこの意味を信じてこそ手続は規範としての権威を有するのですが、こんにちのように誰も教会の機密を信じなくなれば、この手続は空虚な形式に墮し、その結果形骸化した教会結婚の一夫一婦制の下で、言語に絶した淫蕩や多夫多妻がなんらの制限もなく存在するということになる。

トルストイが教会キリスト教に浴びせる非難とはあらましこうしたものです。

#### 4

検閲により発禁処分を受けた『クロイツェル・ソナタ』が、ソフィア夫人の奔走により出版に至った転末はよく知られています。ソフィア夫人はこの作品をどう見ていたのでしょうか。

『クロイツェル・ソナタ』はそのモノローグ形式において、また主人公が社会に投げつける挑戦的の霧困気において、ドストエフスキーの『地下生活者の手記』を憶わせるところがあります。トルストイはここでポズヌイシェフという特異な人物を創造し、その口に託して、合法化された売春である結婚への呪咀、男の肉感に働きかけることで男を牛耳っている女への呪咀、男を否認なく女へ惹き寄せる

ことで理想の実現を妨げている性欲への呪詛を語らせているわけですが、この作品の特異な点は、前述のとおり、主人公ポズヌイシェフの思想がほぼそのまま作者トルストイの思想でもあることです。モノローグ形式の作品はほかにも沢山あります。『狂人日記』の主人公ポプリシチンを作作者ゴゴリと混同する読者はいません。地下生活者をドストエフスキーと同一視する読者もまずいないでしょう。しかるにトルストイが初期の自伝三部作以来極めて自伝的傾向の強い作家であることは周知の事実であり、『クロイツェル・ソナタ』においても、主人公の夫婦生活の描写に作者の夫婦生活の挿話が種々織り込まれていることは容易に見て取れます。況んや作者自身がその「後書」において、主人公の思想はそのまま作者自身の思想であることを明言しているにおいておやです。つまりここでトルストイは自らの性生活の内情を読者に公表することにより、彼自身のみならずソフィア夫人をも公衆の面前に曝しているわけで、これは夫として随分無神経なやり方であったと言わざるをえません。夫の草稿を浄書するのは日頃からソフィア夫人の役目でしたが、夫人は『クロイツェル・ソナタ』を浄書しつつ憤慨し泣いたそうです。なにしろ25年間に亘って家庭の神聖さを説き、女性の使命は結婚し子供を生み育てるにあると教えてきた夫が、今公然とその理想を否定しているのです。「わたしは心底では、この小説がわたしに向けられたものだと思っている……」と夫人はその日記に記しています。彼女は全身に泥をかぶったような気がした。わたしたち夫婦がこれまで築いてきた生活とはいったいなんだったんだろう、というわけです。

とりわけ夫人を憤慨させかつ戸惑わせたのは、作品に表明された思想と作者の実生活の間の完き言行不一致でした。1888年3月といえば、夫婦間の禁欲を説くこの作品の執筆最中ですが、作家の夫婦間には13番目の子供で

ある九男イワンが生まれています。60歳にして妻を13度目に妊娠させる男が、他人に向って夫婦間の純潔を説くというのは、確かに腑に落ちません。『クロイツェル・ソナタ』という小説は、妻への欲情をいかにしても抑えることのできない夫のペンになるものです。1880年代以後、彼は自らの信念に従って財産を放棄し（妻と子供たちの名義に移した）、狩猟を、肉食を、煙草を断ってきました。しかしどうにも肉欲だけは断てなかったらしい。

このことをいちばんよく知っているのはソフィア夫人でしたから、作品が世に出たのち、彼女は再度の妊娠を何にもまして怖れました。作品完成後も、この点に関して夫は一向に変らなかつたからです。トルストイ自身この度はさすがに自分の言行不一致に当惑したと見えて、1889年8月6日の日記にこう記しています。「もし今度新しい子供が生まれたら、どんなに恥ずかしいだろう。とりわけ自分の子供たちに対して。子供たちは妊娠の時期と（『ソナタ』）執筆の時期をつき合わせてみるだろう」。はたして1890年12月、ソフィア夫人は自分が14度目の妊娠をしたのではないかと疑って大層悩みました。しかし幸いこの度は杞憂だったようです。

検閲が教会の圧力に押されて作品の出版を差しとめた時、夫人は伝手を求めて皇帝の拝謁を乞い、当時夫人が刊行中だったトルストイ全集第13巻への作品の収録許可を、皇帝から直きじき取りつけました。夫人のこの行動が、全集第13巻の売行きを確保するという財政的考慮に発していることはもちろんですが、同時にそこには、『クロイツェル・ソナタ』出版のため夫人自ら公然と奔走することで、自分はこの作品に何ら恨みを抱いていないこと、作品の内容は自分たちの夫婦生活に無関係であることを、世間に誇示しようという秘かな意図もありました。自分を突き動かしているものが或る種の虚栄心であることを、夫人はその日記で告白しています。（未完）

## L'amour sexuel dans la pensée russe ( I )

### “La sonate à kreuzer” de L. Tolstoï

AOYAMA Taro

Dans “La sonate à Kreuzer” (1890) Tolstoï prêche l'abstinence complète de l'amour sexuel. L'acte sexuel est un mal, quelque chose d'immonde, qu'il faut éviter autant que possible et, surtout, qu'il ne faut pas embellir et idéaliser comme l'on fait aujourd'hui dans la littérature et l'art. La chasteté absolue est l'état idéal pour l'homme qui a pour but le service à Dieu.

Tolstoï se considère comme chrétien et il allègue les passages de l'Évangile pour soutenir son opinion. Certes, Jésus ne s'est pas marié, les apôtres non plus. Tolstoï résume les paroles du Christ en trois points:

Jésus Christ a dit

1. que le célibataire ferait mieux de ne pas se marier et de rester chaste. (Matth. 19: 10-12)
2. qu'un homme marié ne doit pas répudier sa femme pour en prendre une autre. (Matth. 5: 31, 32 19: 8)
3. qu'un homme marié ou célibataire ne doit pas regarder une femme pour un objet de concupiscence. (Matth. 5: 28, 29)

De cette condamnation tolstoïenne résultent l'une ou l'autre morales pratiques dans la vie conjugale:

1. abstinence absolue entre les époux.
2. union sexuelle tolérée entre les époux, sans désir charnel, uniquement en vue de la procréation.

L'une et l'autre propositions sont également absurdes du point de vue de la vie quotidienne, mais cette absurdité ne rebute point Tolstoï-maximaliste qui s'entêtera pour quelque temps dans cette position.